

カルチャー・ショック

外国人のみた日本



Wangdi Drugyel

出身地：ブータン・シェムガン

所属：財務省

日本滞在：2006年9月～2007年3月

日本で体験した数々の失敗談

ウォンググディ・デユルゲル

初めてブータンを発ったとき、正直なところ鳥かごから放たれた鳥のような気持ちであった。ブータンで抑圧されていたわけではなく、日本に飛び立つ喜びが大きかったためだ。千葉での六カ月間の滞在は、魅了させられるものだった。世界で最も美しく、アジアで最も進んだ国に足を踏み入れることは、すばらしいことでもあった。まさに「夢が実現した」と思うべきか。

来日直後の夜はホテルに宿泊することになった。ホテルの部屋に入った後、空腹のため思い切って外に出た。私は近くのレストランに入り食べ物を注文しようとしたがメニューが読めず、ウェイトレスは英語を話せなかった。不安を感じつつも、暖かくスパイシーなものがおいしいと思い、そう思われるものを注文した。だが驚いたことに、その料理は五人前はあっただろうか、かなりの量であった。出されたものは嫌いではなかったが甘かったため、ウェイトレスに香辛料を頼んだ。その方は何か言ったようだが、五分後にもう一品持ってきた。香辛料以外は何も必要無かったため、その料理は断りたかった。ところが、言葉の壁が障害となり断りきれなかった。四〇〇〇円ほど支払っただろうか。日本での初日は思い出したくない。

来日二日目の夜に、私は友人や親戚に本当に「帰国したい」と電話したい気持ちになったが、ここでの電話のかけ方はブータンとは異なっていた。私の国では、電話をかけた後にその使用料を支払うが、日本で電話をかけるためにはテレホンカードを先ず購入しなければならない。カードを購入するために店を探し回り、一〇〇〇円相当のカードをどうにか購入できた。しかしながら、電話ボックスの中で四五分近く費やしても、電話をうまくかけられなかった。何度も番号のボタンを押したが、「：番号：ください」としか聞こえず、そのメッセージは私には意味がなかった。失望とフラストレーションを感じつつ部屋に戻り、その夜は一睡もできなかった。私はベッドと枕を何百回も叩いたため、それらが話すことができれば私に文句を言ったであろう。

来日二週目、私は整髪用オイルを買いに行った。きちっと見えるようにするため、私のぼさぼさ髪には整髪用オイルが必要であった。三店ほど化粧品店に入ったが見当たらず、四店目で英語をわずかに話せる女性店員に、東京で整髪用オイルを見つけたのかを尋ねてみた。その返事は自信なさげであったが、日本ではジェルが好まれるという。そこで、郷に入っては郷に従うこ

とにした。但し、べたべたのジェルは馴染めず、しかも私の髪のような気がしなく、ハリネズミの針を頭につけているようだ。

さらに、私の人生ではずかしい出来事が鉄道の駅で起こった。IDEASの職員の方に従われ、友人とフィールド・トリップに行く途中のことであった。その日の私の体調は不運にも良くはなかった。途中で電車を乗り換える必要があったため、かろうじてトイレに行くことができたが、トイレの水を流すレバーが見つからない。次に乗車する電車に間に合わないため、二度ほど誰かが私を呼んだ。私は「ちょっと待ってください」と叫び続けたが、誰の助けも求められない状況にいた。その状況下、考えられることは全て行なったため、多量の汗をかいてしまった。誰かが私を笑うかもしれないと思ったが、（このようなことをしたことはないが）水を流さないでトイレを出る決心をした。トイレを出ようとしたところ、私は自分の耳を疑った。私の代わりに誰かが水を流してくれたのだ。神様が私にいたずらをしたのだろうか。

その他にも私は、日本で数々の似たような体験してきたが、さまざまな理由により、それは私だけの秘密にしておきたい。

（前IDEAS研修生／訳＝相山貴史）